

<b>Title</b>	コミュニティ劇団メンバーを対象とした防災力測定
<b>Author</b>	佐伯 大輔, 福島 祥行, 中川 眞
<b>Citation</b>	都市防災研究論文集. 3 巻, p.13-18.
<b>Issue Date</b>	2016-11
<b>ISSN</b>	2189-0536
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学都市防災教育研究センター
<b>Description</b>	
<b>DOI</b>	10.24544/ocu.20191220-004

Placed on: Osaka City University

# コミュニティ劇団メンバーを対象とした防災力測定

佐伯 大輔<sup>1)</sup>・福島 祥行<sup>2)</sup>・中川 眞<sup>3)</sup>

- 1) 大阪市立大学大学院文学研究科 e-mail: saeki@lit.osaka-cu.ac.jp
- 2) 大阪市立大学大学院文学研究科 e-mail: fukushim@lit.osaka-cu.ac.jp
- 3) 大阪市立大学大学院文学研究科 e-mail: nakagawa@lit.osaka-cu.ac.jp

本研究は、コミュニティ劇団への参加の防災力への効果を、劇団メンバーと対照群を比較することにより調べた。その結果、災害に関する知識や備えについてはグループ間で差が無かったが、地域との結びつきについては、統計的な差は無かったが、劇団メンバーの方が高い値を示したケースがあった。また、劇団メンバーでは、「近所における知り合いの数」が増加したという回答が多く見られた。この結果は、コミュニティ劇団の活動が住民間の人間関係を強化する可能性を示している。

**Key words:** コミュニティ劇団，防災力，ソーシャル・キャピタル，コミュニティ・レジリエンス

## 1. はじめに

ここ 20 数年の間に、日本では甚大な被害をもたらす大災害が何度も生じている。これらの大災害の経験から、災害発生時には、行政による救助である「公助」には限界があり、「自助」や「共助」が必要であることが指摘されている<sup>1)</sup>。自助・共助による災害対応を促進するには、地域住民やコミュニティを対象とした防災教育が必要となる。このような観点から、大阪市立大学都市防災教育研究センター（CERD）では、地域住民を対象に、「リスク学習」、「対応訓練」、「環境改善」からなる防災教育プログラムを実施し、一定の成果をあげてきた<sup>2),3)</sup>。

コミュニティの防災力のレベルは、各メンバーがどの程度の防災知識・技能を有するかによって影響を受けると思われるため、CERD が提供するような防災教育プログラムによって地域住民一人一人の防災力を向上させることは、その集積としてのコミュニティ全体の防災力の向上に貢献すると思われる。しかしながら、個人レベルでの防災力の他に、コミュニティの防災力に影響を与える重要な要因として、ソーシャル・キャピタル（social capital）が指摘されている。ソーシャル・キャピタルには、研究分野によって様々な定義があるが、藤見・柿本・山田・松尾・山本（2011）<sup>4)</sup>は、「信頼と互酬性に裏打ちされた豊かな社会的つながり」と定義しており、ソーシャル・キャピタルの高いコミュニティは、共助のレベルが高いと想像できる。実際にソーシャル・キャピタルと防災意識の関係について調査した先行研究では、ソーシャル・キャピタルの高いコミュニティは、自助や共助の意識が高いこと<sup>4),5)</sup>や、災害後の復旧・復興過程において人々の相互協力を効率的にすること<sup>6)</sup>が報告されており、ソーシャル・キャピタルがコミュニティ・レジリエンスを高める可能性についても指摘されている<sup>7)</sup>。

これらの先行研究により、コミュニティの防災力を高めるには、そのコミュニティのソーシャル・キャピタルを高めるという方法が考えられる。CERD とその前身である大阪市立大学都市防災研究プロジェクトチームでは、2012 年より、地域住民をメンバーとするコミュニティ劇団「スミヨシ・アクト・カンパニー（SAC）」の活動を通して、コミュニティの防災力を向上させることを目指している<sup>8)</sup>。SAC は、大阪市立大学近辺に在住する、就学前児から 70 歳代の成人までをメンバーとする約 25 名からなる劇団であり、2012 年の結成以来、2016 年 11 月までに、4 回の公演を行っている。劇団の活動は毎年 4 月に開始し、1 カ月あたり約 2 回のペースでメンバーが集合し、シナリオ作成、配役決定、稽古を行い、年度末に 1 回の公演を行っている。

地域住民をメンバーとしたこのような演劇活動では、共通の目標を持った世代の異なるメンバーが、互いに協力

し合っ、活動を継続的に行うため、ソーシャル・キャピタルの向上に対して、促進的な働きを示すと考えられる。このような観点から、本研究では、SACのメンバーを対象に、防災力とソーシャル・キャピタルを測定し、対照群と比較することにより、コミュニティ劇団の活動が、防災力やソーシャル・キャピタルに及ぼす効果について検討した。

## 2. 方法

### (1) 調査対象者

SACの成人メンバーのうち、2015年度の公演に関わった11名に質問紙を配布したところ、8名（男性2名、女性6名、平均年齢50.4歳）から回答があったため、この8名を対象とした。対照群として、CERDのコミュニティ防災教室（2015年10月17日）に参加した大阪市民20名（男性17名、女性3名、平均年齢54.5歳）を対象とした。

### (2) 質問紙

防災力を測定するための68問からなる質問紙を用いた。質問の内訳は、「災害リスク」について尋ねる16問、「災害への備え」について尋ねる9問、「自分の体力」について尋ねる9問、「災害時の福祉・医療・看護」について尋ねる11問、「防災訓練の経験」について尋ねる2問、「地域とのかかわり」について尋ねる9問、「災害への意識・不安」について尋ねる12問であった。質問紙はA4用紙に印刷され冊子状に綴じられていた。SACメンバーには、さらに、「SACの活動によって生活（近所における知り合いの数、近所の人と話す機会・時間、家族と話す機会・時間、精神的・身体的健康の程度等）にどのような変化が生じたか」、「SACへの参加が子どものメンバーにどのような効果があるか」を尋ねる質問紙が配布された。

### (3) 手続き

(2)で述べた質問紙を用いて、SACメンバーには、2016年2月21日の公演後に質問紙を配布し、後日回収した。対照群には、コミュニティ防災教室の授業前に調査を実施した。回答に要する時間は、15分～20分程度であった。

## 3. 結果

回答が、「まったく知らない」～「よく知っている」などの6件法で行われた場合には、各回答を1～6の数値に変換して、群平均値を算出し、*t*検定により群間で比較を行った。以下では、主要な調査結果を示す。

### (1) 「災害リスク」、「災害への備え」、「自分の体力」

「災害リスク」、「災害への備え」、「自分の体力」に関する質問への回答を図1～図4に示す。ほとんどの項目でSACメンバー（劇団）よりも対照群（防災教室）の方が平均値は高かったが、統計的有意差はなかった。

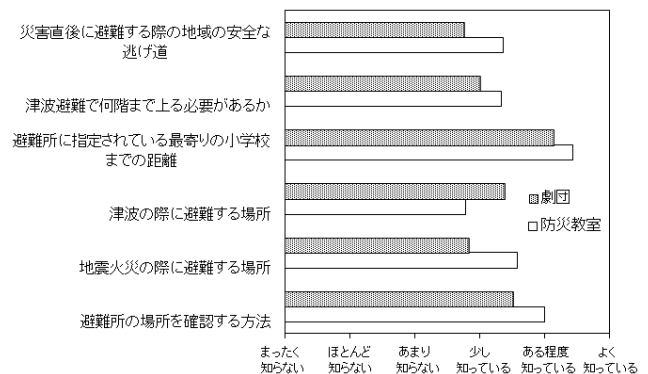
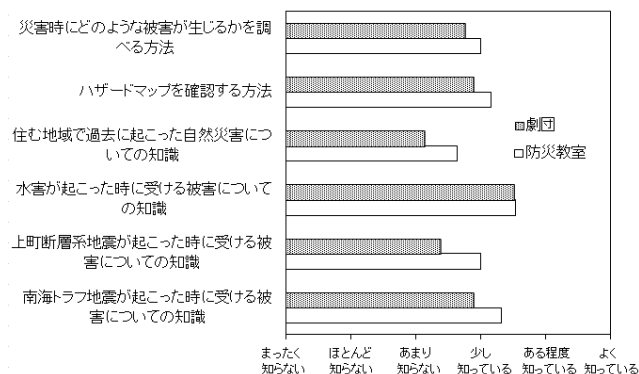


図1 「災害リスクに関する知識」の調査結果(1)

図2 「災害リスクに関する知識」の調査結果(2)

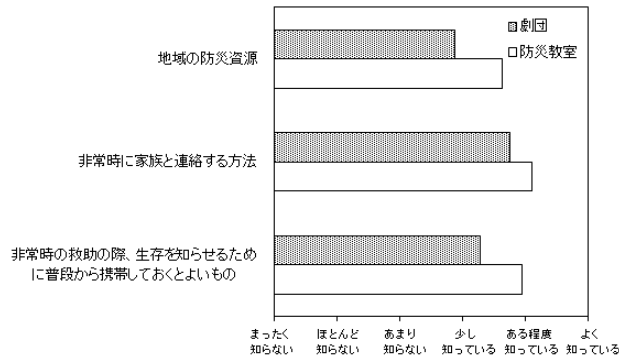


図3 「災害への備え」の調査結果

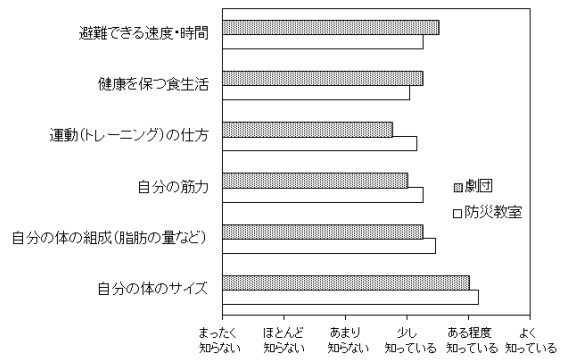


図4 「自分の体力」の調査結果

(2) 「災害時の福祉・医療・看護」, 「地域とのかかわり」

「災害時の福祉・医療・看護」, 「地域とのかかわり」に関する質問への回答を図5, 図6に示す。災害リスクや災害への備えと同様に, SAC メンバーと対照群の間で統計的に有意な差はなかった。図6の「地域とのかかわり」の質問項目はソーシャル・キャピタルに関するものであるが, 統計的には差が見られなかったものの, 「災害時あなたに声かけしてくれるような人が近隣にいる」, 「地域行事(祭り, 運動会等)に参加する」といった, 近隣とのつながりに関する質問項目は, SAC メンバーの方が対照群よりも高い値が得られている。

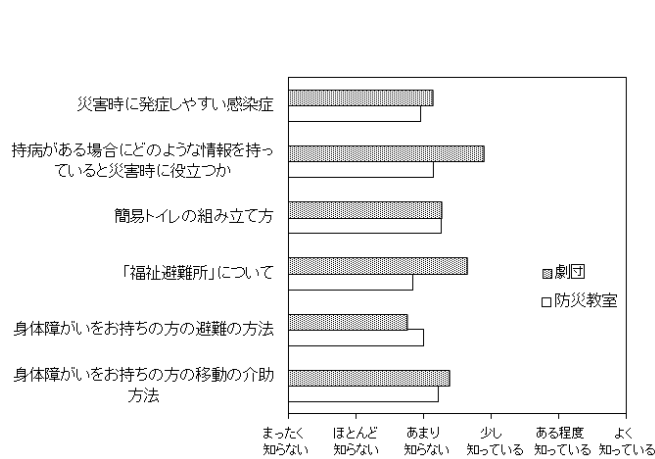


図5 「災害時の福祉・医療・看護」の調査結果

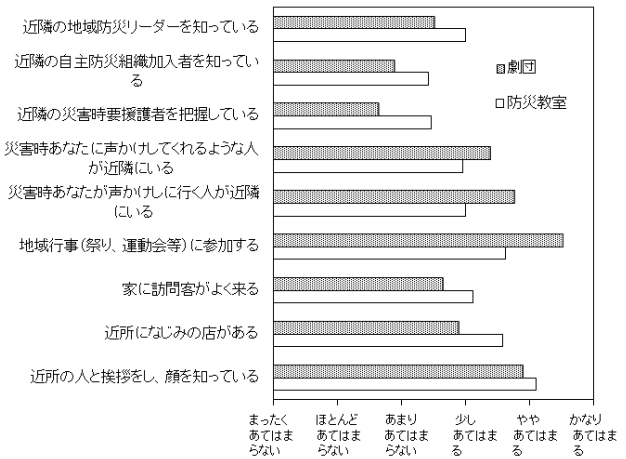


図6 「地域とのかかわり」の調査結果

(3) SACの活動によって生活に生じた変化

SACメンバーに尋ねた, 「SACの活動によって生活に生じた変化」についての回答を以下に示す。

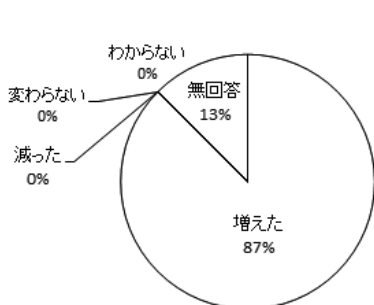


図7 近所における知り合いの数 (劇団メンバーを含む)

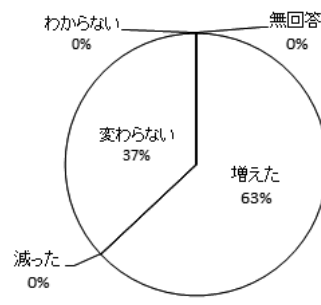


図8 近所における知り合いの数 (劇団メンバーを含まない)

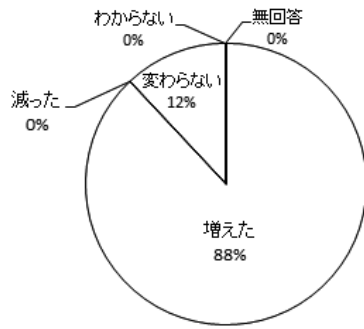


図9 近所の人と話す機会  
(劇団メンバーを含む)

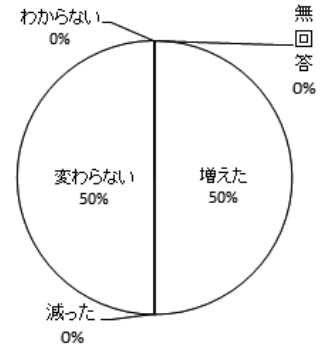


図10 近所の人と話す機会  
(劇団メンバーを含まない)

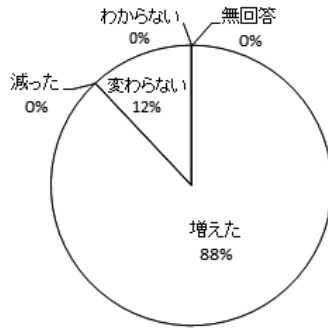


図11 近所の人と過ごす時間  
(劇団メンバーを含む)

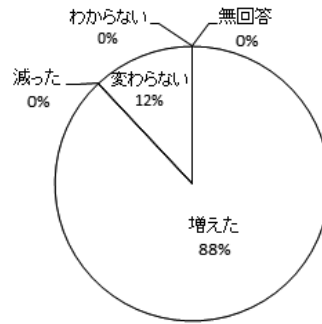


図12 近所の人と過ごす時間  
(劇団メンバーを含まない)

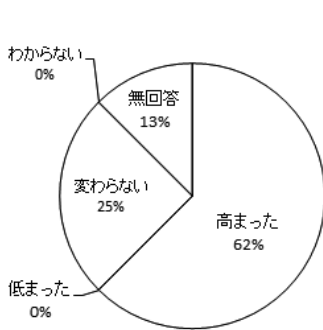


図13 精神的健康の程度

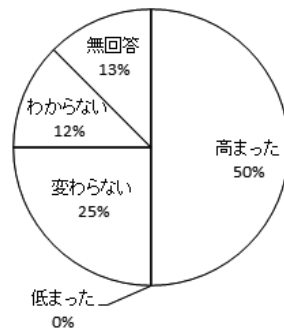


図14 身体的健康の程度

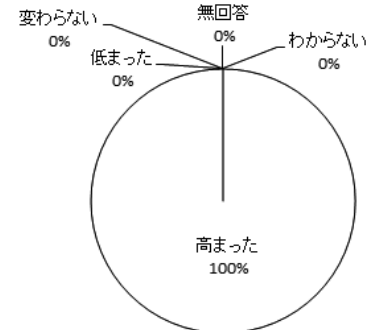


図15 忙しさの程度

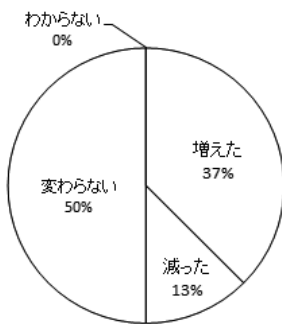


図16 家族と話す機会

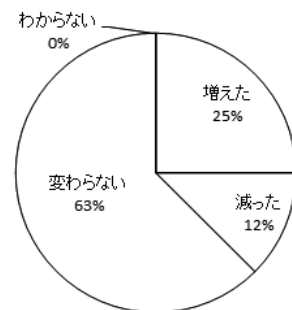


図17 家族と話す時間

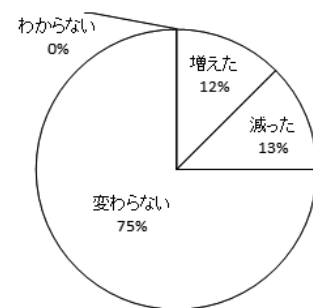


図18 家族と過ごす時間

図7～図12より，SACの活動によって，「近所における知り合いの数」，「近所の人と話をする機会」，「近所の人と過ごす時間」について，「増えた」と回答した人の多いことが明らかになった。さらに，SACの活動によって，「精神的健康の程度」や「身体的健康の程度」が「高まった」と回答した人が半数以上いる一方で，全員が「忙しさの程度」について「高まった」と回答していた。「家族との関わり」については，SACの活動によって「変わらない」とする回答の多いことも明らかになった。

「SACへの参加が子どものメンバーにどのような効果をもたらしたと思うか」への回答を表1にまとめた。「人との関わりを深めることができた」ことを利点として挙げている回答が多い。問題点としては，成人の場合と同様に，「忙しくなる」ことを挙げている回答が多い。

表1. 「スミヨシ・アクト・カンパニーのようなコミュニティ劇団に参加することには，子どものメンバーにとってどのような効果があると思いますか？（良い効果と良くない効果をお書きください）」への回答

練習に参加することは大変でしたが，楽しく過ごせることはとてもありがたく，達成感を味わわせることができ，参加するために約束（学校の宿題や塾などの時間の使い方）を守ることを話しました。

良い点は，人との関わりが増えること。特に世代を超えた関わり。良くない点は，忙しくなるので大変。

面倒だと思いがちな年代ではない人たちとのコミュニケーションを知るのはとても良いと思います。考えなかったことを考える機会にもなると思います。

良い点：学校以外の友達ができる。新しい経験ができる。良くない点：勉強の時間が割かれる。

年齢幅の広い人たちと関わりが持てる。学業との両立が難しいかも。

毎回の練習にこれない。

人前で話せる度胸がついたと思う。横のつながりプラス上下のつながりが生まれたと思う。年々成長したと思う。良くない効果はありません。

良い点：大きな声で話せるようになり、自信がついた。良くない点：目上の人にも対等に接してしまっている。

#### 4. 考察

本研究では，コミュニティ劇団のメンバーを対象に，防災力やソーシャル・キャピタルに関する質問紙調査を実施し，対照群と比較することで，コミュニティ劇団の活動がコミュニティ防災力に与える効果を明らかにすることを試みた。その結果，「災害リスク」や「災害対応」に関する知識等の防災力は，対照群との間に違いが見られなかった。また，ソーシャル・キャピタルに関係する「地域とのかかわり」については，対照群よりも平均値の高い質問項目もあったが，統計的な差はなかった。「災害リスク」や「災害対応」に関する知識といった防災力について，対照群との間に違いが見られなかったことについては，SACメンバーは必ずしも防災教育を受けているわけではないことから理解可能である。「地域とのかかわり」について対照群との間に違いが見られなかった理由として，SACメンバーのデータ数が8例と少なかったため，対照群との間で平均値に大きな差があったとしても，統計的有意差には至らなかったことが考えられる。SACへの入会は頻繁にはなされないため，データ数を増やすのは容易ではないが，今後，解消すべき問題点である。

一方，「SACの活動によって生活にどのような変化が生じたか」を尋ねた質問紙では，SACの活動によって「近所の人々とかかわり」が促進されることを示す結果が得られた。このことは，コミュニティ劇団の活動が，ソーシャル・キャピタルを向上させる効果をもたらしていることを示している。さらに，SACの活動によって「精神的健康」や「身体的健康」についても促進されるという，メンバー個人のレベルにおいても望ましい効果が得られることが明らかになった。「家族とのかかわり」については「変化なし」という回答が多かったことから，SACの活動は，家族とのかかわりに対して，少なくとも悪影響を及ぼすものではないことがうかがえる。

しかしながら，SACの活動のネガティブな側面として，全員が「忙しくなった」ことを挙げている。演劇活動にはある程度の時間や労力を要するため，これに関わることによって忙しくなるのは当然のことではあるが，防災力，およびその基礎として位置づけることのできるソーシャル・キャピタルを向上させるためのモデルとして，コミュニティ劇団を発展させていくには，各メンバーが，無理なく，持続的に関わることのできるものでなければな



らない。この「忙しさ」の要因が、どの程度コミュニティ劇団の持続性に影響するかは、今後の検討課題である。

### 謝辞

調査にご協力頂いた、SACメンバーと大阪市民の皆様にご感謝いたします。本研究は、平成27年度大阪市立大学戦略的研究「地域住民参加型の演劇活動を通じたコミュニティ防災の推進に関する実証的研究」の補助を受けました。感謝の意を表します。

### 参考文献

- 1) 内閣府（2014）：平成26年度版防災白書（[http://www.bousai.go.jp/kaigirep/hakusho/pdf/H26\\_honbun\\_1-3bu.pdf](http://www.bousai.go.jp/kaigirep/hakusho/pdf/H26_honbun_1-3bu.pdf)）
- 2) 佐伯大輔・三田村宗樹・重松孝昌（2014）：リスク学習による参加者の防災に対する意識の変化について，大阪市立大学都市防災研究プロジェクト・都市防災研究論文集，第1巻，pp. 57-62.
- 3) 佐伯大輔・山本啓雅・横山美江・作田裕美・村川由加理・岩間伸之・野村恭代・生田英輔・志垣智子・小島久典・渡辺一志（2015）：災害対応訓練が防災知識や災害に対する意識に及ぼす効果，都市防災研究論文集，第2巻，pp. 7-12.
- 4) 藤見俊夫・柿本竜治・山田文彦・松尾和巳・山本幸（2011）：ソーシャル・キャピタルが防災意識に及ぼす影響の実証分析，自然災害科学，第29巻，pp. 487-499.
- 5) 小野寺良二・濱野強・石田祐（2009）：ソーシャル・キャピタルが地域の防災活動に及ぼす影響についての実証的検証—山形県自治会での事例から—，鶴岡工業高等専門学校研究紀要，第44巻，pp. 45-50.
- 6) 川脇康生（2014）：支援・受援とソーシャル・キャピタル：東日本大震災被災地調査にもとづく計量分析，日本行動計量学会大会発表論文抄録集，pp. 168-171.
- 7) Mayunga, J. S. (2007) : Understanding and applying the concept of community disaster resilience: a capital-based approach. *Summer academy for social vulnerability and resilience*, pp. 1-16.
- 8) 中川眞・福島祥行（2014）：都市防災のための地域劇団創成プロセス 大阪市立大学都市防災研究プロジェクト・都市防災研究論文集，第1巻，pp. 43-49.